

コープネット事業連合

100の産地でGAPを实践 生産・流通までを点検

前回（本誌153号）で紹介した生協版GAP（青果物品質保証システム）を实践している生協のひとつが、コープネット事業連合だ。生協版GAPはほかのGAPと異なり、産地の取り組みを生協のバイヤーが点検するという二者認証を实践している。また、農業規範のみならず、流通規範による点検を進めている。第一商品部農産担当次長・佐藤和男氏に現状と課題を聞いた。

——生協版GAPの進捗状況を教えてください

私たちが取引している産地のなかでも、生協版GAPに取り組んでいるのは「産直産地」といわれるところ。産直産地とは、アイテム、品種、栽培、流通方法などに関し、事前に確認した上で取引をする産地のこと。全国に約430ある産直産地のうち、100産地が生協版GAPを導入しています。実は15年ほど前から「産

地A Pを实施してもらおう計画です。

——生協版GAPと、ほかのGAPの違いは？

産地と私たち生協が対等の立場だということが大前提です。GAPは点検をする側と受ける側という上下の関係になりがちですが、安全や品質を確保していくためには、作る側と生協の組合員に供給する側が対等な立場に立った上で、それぞれの責任を果たしていくための「パートナーの関係」を基本に据えています。

また、生協には生産されたものが組合員に届くまでの一気通貫の仕組みがあるので、農業規範だけでなく、流通規範まで網羅している点特徴です。

——生協版GAP導入から点検までの流れは？

「生協の産直における適正農業規範」のチェックリストを、実施する産地に送り、各産地で自己点検をしながら改善してもらいます。

点検者は生協のバイヤーや品質管理担当者です。皆、日生協が主催する講習会を受けています。

当初は点検者の目線を統一させるために複数体制で点検に臨んできましたが、産地数が去年までの27カ所から今年には100カ所に増えた上、複数のスタッフを点検に送り込むのはコスト面の負担が大きいため、現在は1名の点検者で実施しています。点検の実施ペースは3～5年に1度程度です。

——バイヤーが点検すると、馴れ合いが生じる懸念はありませんか？

それはありませんね。GAPでもっとも大事なものは、現状を見つめ、至っていない項目を改善していくことの繰り返しです。改善すべき点を客観的に指摘する以上に、どうすれば改善できるかをフォローしていく体制作りのほうが重要だと考えています。

そのため私たちも、生協版GAPを实践している産地ごとに未達な点を列記し、「この産地はこの点は改善できない」というように時系列で追っていく表を作成し始めました。こまめに管理していく仕組みを整えつつあります。ただ、点検者講習会の参加



コープネット事業連合
佐藤和男次長

1951年山形県酒田市生まれ。東京でコープとうきょうを経て、現在コープネット事業連合の第一商品部を産を担当。入協以来、農産関係部署を歴任。

れぞれ機能や卸もいる。そ

による各バイヤー自身の点検スキルの向上や、各バイヤーの目線を統一していくことは課題ですね。

——これまで3年間やってきました、産地の反応はいかがですか？

項目が多く（生産者編232項目、産地団体編332項目）、それぞれの項目をなぜクリアしなければならぬのかを理解するにも時間がかかります。点検にも最低4〜5時間かかります。大変な面もあると思いますが、考え方は確実に理解されています。

かつて生産者の納屋や作業場をのぞくと、農薬の空瓶が無造作に置かれていたのですが、生協版GAPに取り組み始めてからは、整理整頓に気を配る産地が増えてきました。集荷場でも鳥が入らない

ように戸の開け閉めを徹底したり、糞が落ちて異物混入の原因にならないように防鳥ネットを設置するところも出てきました。

無登録農薬問題に端を発するポジティブリスト制度のスタートをきっかけに、農場管理が必要なのだという意識が生産者の間に急速に浸透してきています。「安全管理や記帳を徹底しないと産地が維持できない」という危機感を持つようになりました。生協のみならず、日本GAP協会や農水省がGAPを普及するようになったことも影響しているでしょう。

——流通規範の進捗状況は？

約30の流通業者が取り組んでいます。流通規範（GDP）は去年からスタートさせ

役割が異なるため、全部網羅した上でひとつの基準をつくるうとしたら、項目が400ぐらいになりました。いずれの流通業者も自分たちの業種に当てはまる項目を実践してもらっています。

これが軌道にのれば、次は販売編です。産地や取引先から商品を受け取った生協がこれをどう売っていくのか。商品管理、衛生管理がメインとなるでしょうが、来年以降の課題になると思っています。

——組合員にはどのぐらい認知されていますか？

まだあまり知られていませんが、今後は認知度を高めていきたいと思っています。カタログや広報誌で紹介していますし、組合員との交流会や学習会を頻繁に行ない、その都度話題にしています。ただ、GAPの個々の点検項目まですべてお知らせすることまではしなくてもいいのではと思っています。

GAPが万能で、GAPさえやっていたら食の安全が確保されるというわけではありませんが、そのための一環と

して実践していることは伝えていきたいし、GAPに取り組んでいる産地の思いも一緒に伝えたいですね。

——今後の課題や、制度の改善に取り組んだことがあれば教えてください。

100カ所の産地で導入といても、実施しているのは一部の農家で、全体ではありません。なかには「自分の農場だけでなく、地域全体に広げたい」と前向きに取り組む産地もあります。私たちとしても「点から面へ」と広げてほしいところですが、あくまでも産地が重要性を理解し、納得して取り組まないと、実のあるものにはなりません。

また、項目を満たすために、設備投資や新たなコストが発生する場面もありますが、こちらから無理なお願いはできません。金銭的な負担が絡むので時間がかかります。これも課題のひとつですね。

このほか、各生協や事業連合はこれまで独自にGAPの点検を進めています。将来的には複数の生協と取引のある産地の場合、A生協がG

P点検を行えば、B生協にもその点検内容が共有化できるようになればいいと思っています。

——日生協が日本GAP協会の理事に就任しましたが、GAP全体をどうとらえていますか？

それぞれのGAPを見ると、要求項目はあまり違わないんですよ。相反するものではないのですから、スタンダードなGAPがひとつあったほうが生産現場はやりやすいでしょう。

私たちとしては当面は生協版の農業規範、流通規範、販売規範を確立して、軌道にのせていきたいと考えています。

【コープネット事業連合】

関東・信越にある生協（いばらきコープ、とちぎコープ、コープぐんま、ちばコープ、さいたまコープ、コープとうきょう、コープながの、コープにいがた）とその子会社で構成する生協の連合会。組合員数は約342万人。事業高約5092億円（2007年度現在）。本部は埼玉県さいたま市。